

まち どん ほ 街散歩

新橋・汐留

新たな歴史を刻む街 新橋・汐留

サラリーマンの“夜のオアシス”として知られる「新橋」。しかし、「汐留」となると、「それはどこ？」と尋ねる人も少なくないだろう。“鉄道創業の地”として、一世を風靡した新橋・汐留。今では、ところどころにその面影を残すだけである。そんな汐留に、今世紀を代表する新たな街が誕生する。薄れゆく新橋・汐留の記憶を心に留めようと、一人、散歩に出る。

浜離宮前踏切信号機

▲1931～87年1月まで、56年間、国鉄汐留駅と築地市場の間の貨物引込線で使用されていた踏切信号機。最盛時には、1日150輛の貨物車がこの踏切を通過したという。地元の要望で、銀座には珍しい鉄道踏切信号機として、ここに残された。

烏森神社

◀▼940年、平将門の乱を平定した藤原秀郷が勧請した烏森稻荷社が縁起とされる。1455年に足利成氏が戦勝を祈願した願文を所蔵するなど、古い由緒がある。江戸時代は武家屋敷に囲まれた社だったが、維新後は新橋北から芸者衆が移り、周辺は烏森の花街となった。



銀座の柳二世

新橋駅前のSL

◀ JR新橋駅前のSL広場に置かれている「C11 292号」。終戦の年、1945年に作られ、主に中国地方を走り回った。走行距離は108万3975km。1972年、鉄道100年を記念して、かつての雄姿を再び披露することになる。新橋が鉄道創業の地であることを、改めて思い出させてくれる。



浜離宮から見る汐留超高層ビル群

▶ 旧汐留貨物駅跡地に建つ超高層ビル群。「汐留シオサイト」と名付けられた街の新たな幕開けは、もう間もなくである。

JR新橋駅西口には、サラリーマンが噴水に飛び込むことで有名な、小さな広場がある。「SL広場」だ。ここ新橋は、鉄道創業の地といわれている。しかし、最初の新橋駅は、現在大規模再開発が進む汐留で開業し、後にこの場所に移動したという。ここを利用している人のうち、どれだけの人がそんな歴史を知っているのだろうか——。広場に置かれているSLを見ながら、ふと、そんなことを考えた。

そこから、小さな飲食店が軒を連ねる裏路地へ足を延ばす。夜は赤提灯やネオンに明かりが灯る賑やかな界限だが、古くからの土地の鎮守さま「烏森神社」がある。時折、神社に参拝する人の拍手が参道に響き、すがすがしい気持ちになった。

今度は、西口から汐留方面に向かうため、高架下へ。この辺りは、今でもレンガ積みの鉄道アーチ橋を残し、高架下を店舗として使用している。新旧が入り交じって、独特の雰囲気を出し出す不思議な空間だ。

線路をくぐり抜けると、正面には、陽の光を反射させてそびえ立つ、超高層ビル群が見えてくる。その大きさと近未来的なフォルムには、近づけば近づくほど圧倒される。私には、国鉄の貨物駅だった頃の汐留は記憶にないが、イベント会場だった頃、何度か足を運んだことがある。あの広大な空間が、まさかこんなビル街に……。まるで、タイムスリップをした気分だ。

そこから、地元住民の強い要望によって残されたという「踏切信号機」を横目に、「浜離宮恩賜庭園」へ。江戸時代の代表的な大名庭園で、海水を引いた汐入庭園としては、都内に唯一残されたものだという。庭園内には、徳川六代将軍家宣のお手植えと伝えられる「300年の松」や、将軍の江戸への出入り場として使われた「将軍お上り場」など、将軍家に縁のあるものが多い。私は、ここには何度か足を運んでいる。海風に吹かれながら東京湾を眺め、汐入の池に浮かぶ「中島の御茶屋」でお茶とお菓子をいただく。これがいつものコースだ。後ろには、庭園の緑の向こうに、例の超高層ビル群が並んでいる。景観は変わっても、ここに吹く海風のおいとここちよさは変わらないのだと、改めて感じた。そして、新たなスタートを切る汐留という街を、これからも見続けようと心に決めた。

参考文献：「江戸・東京 歴史の散歩道3」（街と暮らし社）
「東京都の歴史散歩<上>」（山川出版社）

浜離宮恩賜庭園



中島の御茶屋内

▲江戸時代初期までは、アシの生い茂る将軍家の鷹狩場。江戸時代、六代将軍家宣の時代に、将軍家別邸「浜御殿」となった。海水を引いた汐入の池を中心とする回遊式庭園の代表的なもので、都内で唯一現存する。

レンガ積みの鉄道アーチ橋

